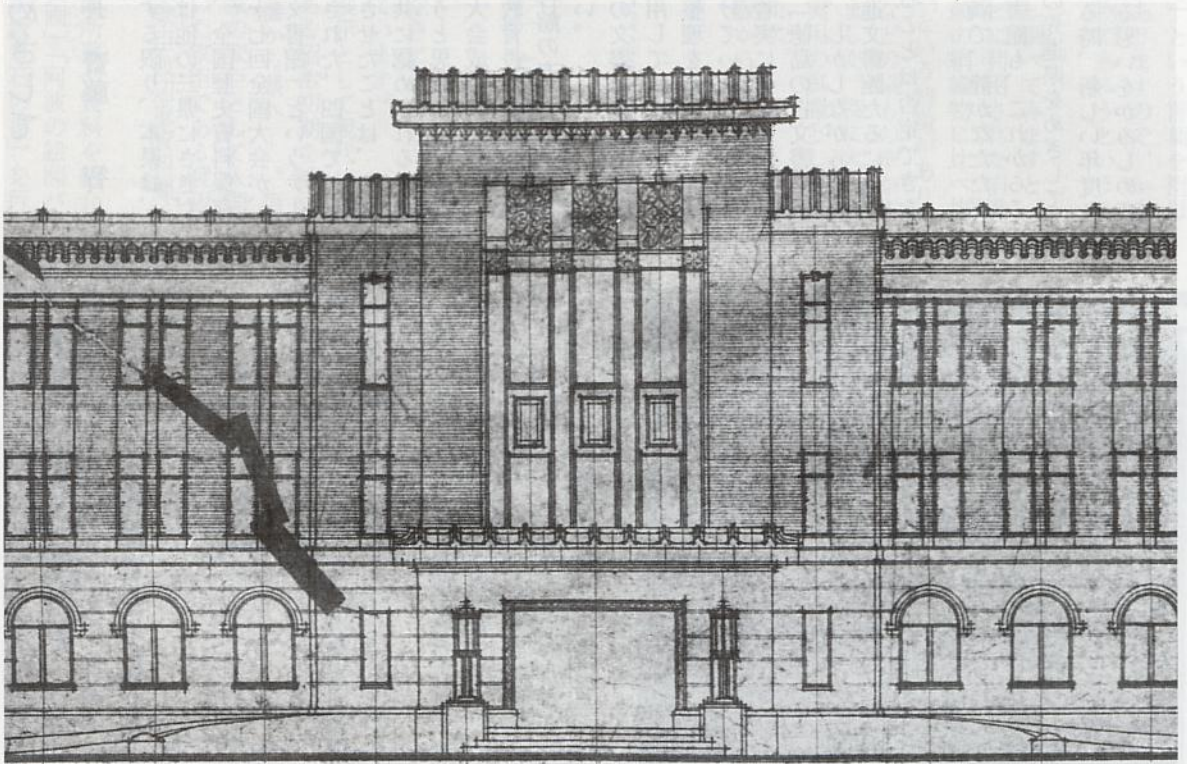


もん じょ かん  
**文書館だより**

徳島県立文書館

第3号



旧県庁正面（設計画より）

第二回古文書講座（初級）

内容 古文書解読のための基礎講座  
 期間 五月十六日から九月十九日まで  
 隔週土曜日

回数 十回

時間 午後二時から二時間

場所 文書館二階講座室

定員 四十五名

申込 四月十四日まで

詳しくは左記へお問い合わせください。

〒七七〇 徳島市八万町向寺山

文化の森総合公園内 徳島県立文書館

電話 〇八八六（六八）三七〇〇

所蔵資料紹介3

「小坂奇石の書」（四月二十六日まで）

第四回展示

「山村庄屋の役割

—美馬郡西端山村・谷家文書—  
 （四月二十八日～八月二十三日）

●●● 目次 ●●●

徳島藩の儒学……………大和 武生…2  
 全史料協徳島大会報告……………4  
 覆水は盆にかえらず……………齋藤 智…6  
 一枚の写真……………7

に資料として引用されている。合田家は六代藩儒として徳島藩に仕官した。

宝永五年(一七〇八)増田立軒が阿波第二の儒家として五代藩主綱矩に採用された。先祖は阿波の藩医であったが、京都の儒者・中村惕斎の高弟として師に厚く信頼され養子になっていた。増田立軒は藩儒に迎えられ「渭水聞見録」の編纂を行った。同書は正勝の父から六代藩主宗員までの編年史である。特に関ヶ原合戦での家康側への荷担を、石田三成との確執の結果としている点にこの書の意図がうかがわれる。

立軒には多くの著書により、師・惕斎の学問を普及させた。阿波の藩校のテキストが惕斎点(点―漢文の読み方)によるのは彼の功績である。増田家も六代藩儒として仕官した。立軒の著者には「渭水聞見録」「惕斎先生行状」「仲子語録」の他に、周易・中庸・論語・孟子など古典の解釈書がある。また師の講義録・文集の整理本が九種ある。

### 政治顧問

明治四年(一七六七)讃岐出身の柴野栗山は十代藩主重喜により招聘された。阿波藩主で儒学の必要性を最も痛感していたのは、秋田から養子に入ったこの藩主であった。

栗山は、幕府の大学・昌平黉で学んだ後、京都で国学など研修している時、阿波の藩儒合田宮治の紹介で阿波に仕官することになった。

重喜は藩政改革の柱に、経済改革と儒学による綱紀肅正をすえた。その役割の一端を栗

山が担った。彼は元来、強い政治的関心を持ち、のち幕臣に転出するや朱子学以外の学問を抑圧する寛政異学の禁を建白している。

栗山の著書には、「雜字類語」「対相四言」の辞書類、中国の政治論「国鑑」、「賢聖障子名臣冠服考証」「寺社宝物展覧目録」の調査報告の類がある。彼自身の文章や漢詩として『栗山堂文集』『栗山文集』『栗山逸文』と三種類の『栗山堂詩集』の著書がある。

天明七年(一七八七)栗山が幕府に招聘されるや甥の碧海がその後を継ぎ、柴野家は三代続いた。碧海は名文家として著名であり、その文章群は『枕上集』に収録されている。

### 藩校の教官

安永七年(一七七八)、那波魯堂は十一代藩主治昭に招聘された。

急激な改革を計画した重喜の失脚後、その意志を継いだ実子・治昭は、学問を重視し藩校を建設した。従来、三家であった藩儒がこの時期九人に急増するのは藩校の教官としてである。

魯堂は阿波を代表する教育者である。著書には『学問源流』『東游篇』、左伝・詩論の校注本があり、未公刊本では『韓人筆談録』『魯堂先生筆記』『魯堂先生学則』『那波魯堂文集』などがある。

那波家は、網川・鶴峰・蜷北の四代藩校の教官として仕官した。

幕末に至り藩校生の急増化は多数の教官を必要とした。このため藩の軽輩の中からも学問のできる人材を藩校の各種の教職員として

採用した。藩校教育の中で特筆すべきは、増田衡亭の校訂による『資治通鑑綱目全書』で、藩校の出版事業である。

衡亭は藩医・新居莊筑の三男だが、儒家として由緒ある増田立軒の家系が四代で絶えていたのを、藩主が増田家を継がしたものである。

### 歴史・地誌の編纂

政治顧問として仕官した初期の儒者の仕事は藩主の年譜の作成や『渭水聞見録』などのような歴史類の編纂であったように、儒者の主要な任務は藩の威信を高めるための編纂物や藩主の年譜作りであった。このような藩出版物が編集される時は、藩政の引き締め時期であることが多い。

阿波の地誌類として『阿陽記』(明和二年・一七六五、山本直水軒)、『阿府誌』(寛政年間・一七八九〜一八〇一、赤堀良亮)などがあり、その著者は藩士や藩主に近い人であった。

『阿波志』(文化十二年・一八一五)は京都の儒者・佐野山陰が、阿波十郡からの報告をもとにして京都に在任のままに編纂したもので、藩編纂の出版事業といえる。

徳島県立文書館は、郷土にかかわる資料を収集するとともに、こうした先人たちの著者をも積極的に収集する責務を持っている。徳島の儒者について調査研究する場合には、まず最初に訪れる情報センターを指すべきであると自戒している。

(副館長)

## 文書館先進県をめざして

館長 齋藤 智

県立文書館の設置に関する限り、本県は、全国で十九番め、四国では他の三県にききだつ先進県である。そして、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会の第十七回全国大会が、昨年十一月「地域の中の文書館」というテーマで、当館を中心に開催された。四国では初めて大会を大過なく成功させたことは、これも先進文書館として名実共に認められるための道程の一つなのであろうと思われる。出席者の方々は勿論のこと、大会成功のために、お力ぞえを戴いた近藤県教育長はじめ教育委員会の方々が、文化の森各館の方々に對して、心より感謝を申しあげたい。

このような中で、本県の文書館は、完備された文書類収蔵設備を活用して、古文書・公文書・行政資料の収集と整理を進めるべく、館員一同日夜、努力を続けているところである。この間、利用者数も着実に伸び、古文書講座修了者がまとまって「徳島の古文書を読む会」へと発展している。しかしながら、まだまだ、真の意味での先進文書館たるには、幾多の課題を抱えていることは否定できない。

文化の森総合公園の片隅で、静かなたたずまいを見せているわが文書館も、これからこそ、真の意味での文書館の先進県をめざして、われわれの真価が問われる時、新しい年度を前にして、身の引き締まる思いをかみしめている私たちである。

## 徳島藩の儒学

書誌を中心にして

最近出版された陳舜臣「儒教三千年」には、「儒学は中国と等身大である」として、中国が解らなければ儒学は解らないと言っている。日本人にとっては「儒学が解からなければ中国が理解できない」と言えるのではないだろうか。

儒学に関して、日本の漢学者が孔子や韓非子など個々の思想家の一言一言にのみこだわっているのに反し、陳氏の理解は中国史の現実の中で儒学がいかに機能してきたかを分析している点に新鮮味を感じて一気に読んだ。

中国での儒学の影響力や作用の大きさに比べ日本での儒学は、その社会的立場も、政治的影響力もはるかに少ない。

### 日本の学問

日本の場合、儒学に限らずすべての学問は、江戸時代まで、一部の貴族や僧侶たちによって研究されていただけで、政治的にも社会的にも無力で、民衆の生活におよそ関係のないところで作用していた。

乱世を生き抜くための鋭い洞察力を持った徳川家康は、慶長五年秋九月に京都に入るや、藤原惺窩を招いて意見を聞いた。その後、惺窩は家康の要請にもかかわらず、自分自身は仕官することなく、高弟の林羅山を推挙した。

### 大和 武生

家康は「天下国家を治め、人の道を行うのには、儒学（聖賢の道）による以外にない」ことを悟ったと『東照宮御実紀』にある。天下国家の長期安定には、武力を中心に据えながら、忠孝を中心にした思想統制の必要があることを家康は鋭く見抜いていたわけである。

中国では学問を支配者になる必須条件と捉え科挙制度を設けたので、学者（科挙合格者）は武官の上に位置付けられた。しかし日本では武力政治の補完物として学問が考えられた。このため学者は支配者（武士）の家臣の立場でしかなかった。この傾向は、阿波においても同様で、儒者の社会的立場は低く、一五〇〜二五〇石程度の中級藩士でしかなかった。

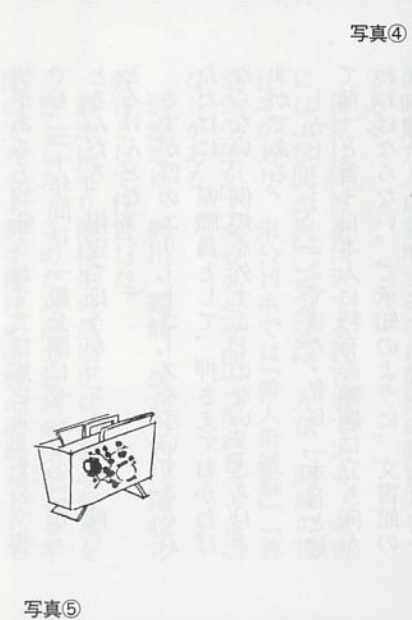
### 阿波の儒学

寛文元年（一六六一）三代藩主光隆は、久世大和守広之の紹介で、京都の儒者合田昌因を阿波最初の儒者として任用した。昌因は京在のまま、徳島藩学政の政治顧問としての役割を果たした。著書として蜂須賀正勝の父から光隆に至るまで六世にわたるの藩主の年譜を編集したといわれる。この年譜は現存しないが『蜂須賀家記』（明治五年・岡田鴨里撰）

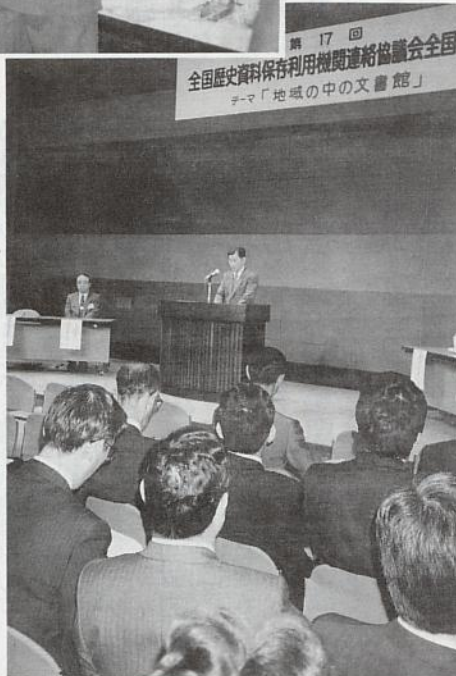


写真③

七・八日の大会は、二十一世紀館イベントホールを中心に行われました。  
 七日は、午前中に総会が行われ、特に文書館専門職養成問題の検討と特別委員会の設置、さらに公文書館法の細則制定に向けて推進を図っていくことが決まりました。  
 午後からは、研究会に入り、大会運営委員会から大会テーマ「地域の中の文書館」が提



写真④



案された後、二本の研究報告がありました。  
 一本目は岡山県から平成六年度の公文書館開館に向けてその課題と方向に関しての報告がありました。二本目は尼崎市立地域研究史料館から、地域と最も密着した形となる市町村の文書館について報告がありました。  
 ついで討論に入りましたが、翌日の分散会

(写真④)

写真⑤



討議、全体会討議を通じて四時間半という長時間の討議にもかかわらず、白熱したものとなりました。公文書館法をどう生かすか、またどう変えていくか、という問題から始まり、専門職員制度の確立・行政職員の啓発・行政以外の文書館・資料館の問題に至るまで多岐にわたりました。  
 (写真⑤)

# 全史料協 徳島大会報告

さる11月6・7・8日文化の森総合公園内で、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会の全国大会及び研修会が開催されました。行政や大学の資料収集・保存・利用に関する悩みを持った人々が全国から約180名集まり盛況な大会となりました。

六日の研修会は三会場で行われました。

## Aコース 総合基礎コース

(文書館講座室)

午前中は国内の文書館事情と文書館設立の必要性について八潮市立資料館の遠藤忠氏から講演がありました。午後には、海外の文書館事業を踏まえた上で、国内の文書館を考えようという国立公文書館の小川千代子氏による講演と活発な質疑応答がありました。

(写真①)

## Bコース 分野別コース(1)

(二十一世紀館イベントホール)

Bコースは、資料整理法について研修が行われました。午前中は国立史料館の安藤正人氏により史料整理の原則と段階的な整理法について、午後には北海道立文書館の青山英幸氏より公文書の目録作成を対象にした具体的な整理法について講演がありました。(写真②)

## Cコース 分野別コース(2)

(図書館集会所1)

資料の保存・補修・管理について最新の情報に関するものが、研修Cコースです。午前中は東京保存修復センターの坂本勇氏より、文書館の第一の使命である保存の原則について、ペーパーセンサなどの簡単な機器の使い方について講演がありました。午後には国立史料館の広瀬睦氏より、史料の防護・代替化・配架・修復等に関する具体的な講演がありました。

(写真③)

写真①



写真②



私も「めいせんの着物」という言葉を祖母から何度か聞いたことがありますので、かろうじて「めいせん」が織物であろうということは知っていました。

「めいせん」について少し調べてみますと、衣類・座布団・夜具地などに利用された絹織物となっております。一般の絹織物に比べ埃が付きにくく、破れにくいという特徴があり、天保期から、紺・茶・鼠などの縞ものやかすりものなどが作られていました。特に大正から昭和前半期にかけて、実用の呉服として需要が多かったとのことでした。

写真に写った一枚の看板からもその時代が見えてくるものです。

(福本紀美子)

### 「明治の留学展」を終えて

文書館では、展示室を空きにしないという方針のもとに展示を行っています。

これまでに、開館記念展示として現代に至る「徳島県」の成り立ちである昭治初期を描いた展示「徳島県の成立―藩から県へ―」。第二回展示として、蜂須賀家の家臣として入国時から江戸時代を生き抜いた家臣である渡辺家を取り上げた「蜂須賀家臣渡辺家資料展」を行ってきました。

それら展示の合間に、館所蔵の資料を紹介するため、「蜂須賀家の書画」「阿波の絵図パート1」を行い、現在「小坂奇石の書」を行



林省三  
井上驕太郎

林十吉  
蜂須賀万亀治郎(推定)

っています。

展示は、決してポピュラーな施設とは言えない文書館をアピールする大事な機会であると同時に、所蔵資料の概要を利用者にお知らせして利用を促進する働きも持っていると考えます。

第三回展示「明治の留学」は、明治初期に隣太郎・弁治郎の兄弟ふたりをロンドンへ留学させた井上家の文書を紹介したものでした。

右の写真は、展示では使うことができませんでしたが、井上家文書に入っております。

隣太郎・弁治郎と一緒に留学していた林省三・十吉(のち井上と改姓)・一名は不明(蜂須賀万亀治郎か?)の写真です。印画紙の裏には、ロンドンのペーカー・ストリート五五・写真屋エリオット&フライと印刷されてお

り、三七八七七という写真のナンバーがペン字で入っています。このロンドンの写真屋で撮影されたものでしょう。年齢からいっても一二〜一五歳で留学後間もない頃(明治五〜六年か)の写真と思われますが、断髪・洋装のスタイルと鋭い目に、留学への強い意志が感じられます。

井上家文書には留学関係史料のほかにも、江戸中期からの江戸への回船関係史料・辰巳新田(阿南市)等新田開発関係の史料・小松島浦の町場に関する史料など興味深い史料があります。史料目録により、ご利用ください。

文書館では今後もわかりやすく、歴史やそれを支えている資料に興味を持っていただけるような展示を行っていきたくと考えています。

(金原 祐樹)

## 覆水

## 盆にかえらず

齋藤 智

私の県職員としての生活も、いつのまにか三十余年を数えた今、立場は違っても、利害損得を離れて、仕事についての悩みや、苦勞を共にしてくれる先輩や同僚に恵まれることが少なくないのは、有り難いことである。文書館業務としての、特に公文書・行政資料等の収集についても、ずいぶんお世話になっている。この事は、定年近しとは言えまだまだ、県庁と言う職場に捨てがたい愛着の残っているゆえんでもある。

そんな先輩の中のある人が、昔のよしみもあって、公文書収集のため、何かとお力添えをいただいた後で、こんなことを言われた。

「しかし、文書館長さんを前にして、言にくい話しじゃけんとなあ……。古い公文書やかし、なんしにいつまでも置いとかんなんのかと、わしや思うなあ……。ほれも、一定の保存期間を過ぎたもんをなあ……。」

これは、実のところ、八十万県民のあらゆる行政ニーズに対応すべく、県庁在職数十年間を通じて、あえて言うなら連日連夜、公文書の立案、決裁、施行に取り組んでいる全ての県職員の、心の隅に多かれ少なかれ、存在しないと云えば嘘になる意識ではないだろうか？

「いや、解つとる。歴史的文化的に保存価

値があると判断されて文書館に入った公文書でも、三十年間は、一般公開はせんことになつとるんだろ。規定でほうなつとるんは、解つとるけんとなあ……。」

さすが県のエリートコースを歩いてこれただけに、県職員として、押さえておかねばならない、例規を外すことのないところはさすがである。

しかし……、ここでまた、私は、「本音と建て前」と言う日本人に特有の難題に立ち向かわねばならない。ご承知のように、文書館の収集対象となるのは、公文書だけではない。時々刻々、散逸かつ滅失の危機に瀕している、歴史の証言者としての貴重さは、古文書も公文書も何の変わりもないのである。

その収集整理保存については、決してなござりにはできないのだが……。建て前として、解つてはいるけれど……何故か積極的になれない廃棄決定公文書の保存。

だが、わが親愛なる県職員のみなさん！法規に忠実な仕事に、如何に徹するかと言うことを、誇りとも生きがいともして、薄給にもめげず日夜奮闘している県職員諸兄弟姉にあえて言おう！われわれの子や孫の世代に、胸を張つて私達が如何に適正な仕事をしたかを示す証として、私達の汗と油の結晶を、その時代の県庁舎を模した建物の中に、貴重な遺産として、整然と残そうではないか。

覆水は盆にかえらず、散つてしまった花は二度と枝には帰らない。焼却した公文書は、二度と見ることも、見せることも出来ないのだから……。

(館長)

## 一枚の写真

写真は歴史を語ってくれる重要な資料です。文書館が所蔵する写真を紹介するコーナーです。

## めいせん



右の写真は、昭和二八年頃の新町橋通りを写したものです。後ろに見える山は眉山です。道の幅や建物等町の様子が現在とは随分違うようです。

写真の左手には、「めいせん」と大きく書かれて人目を引く看板がありますが、この言葉は今では余り使われていないようです。

# 文書館のあゆみ

- 平成3年9月3日 資料紹介2「阿波の絵図」
- 10月27日 パート1
- 10月29日 第3回展示、明治の留学
- 3月1日 展
- 10月30日 徳島市井上家文書追加分を受け取り
- 11月6日 全史料協研修会を文化の森総合公園にて開催
- 11月7日 全史料協大会を二十一世紀館イベントホールにて開催
- 11月21日 県内各出先機関にて行政資料を収集
- 11月22日 阿南市椿泊真島家文書受け取り(第1回)
- 12月10日 徳島市幟町坂田家文書受け取り
- 12月12日 阿南市椿泊真島家文書受け取り(第2回)
- 12月16日 県庁各課の行政資料を収集
- 平成4年1月20日 県内各出先機関にて行政資料を収集
- 2月20日 文書館協議会を開催
- 2月26日 資料調査委員会を開催
- 2月27日 徳島市八万町古川家文書を受け取り
- 3月3日 資料紹介3「小坂奇石の書」
- 4月26日

3月13日 文化の森紹介展を池田町  
 15日 立体育館にて開催

## 行事予定

- 4月28日から 第4回展示  
 「山村庄屋の役割―美馬郡西端山村谷家文書―」
- 5月16日から 第2回古文書講座を開催  
 (二ページ参照)
- 8月25日から 資料紹介4「引き札(商店の広告)」
- 10月27日から 第5回展示「県庁の変遷」

## 利用案内

### 開館時間

\* 九時半～五時  
 (四月～九月の水曜日は七時まで延長)

### 休館日

- \* 毎週月曜日
- \* 毎月第三木曜日
- \* 祝日(五月三日～五日、十一月三日を除く)
- \* 年末年始(十二月二十八日～一月四日)

### 交通

- \* JR徳島駅から/徳島市営バス・徳島バス利用(二十五分)
- \* JR牟岐線文化の森駅から/徒歩(二十分)

## ◆編集後記◆

文化の森の大きな特徴の一つに、コンピュータデータベースによる資料検索システムがあります。コンピュータの世界はそれこそ日進月歩ですから、ハードの面でもソフトの面でもメンテナンスが必要不可欠です。

なぜ文書館にコンピュータが、と思われるかも知れませんが、総数五万点に及ぼうかという資料を誰でもが管理できるようにするためには必要なものなのです。

まだまだ利用するには入力データ量が少い文書館データベースですが、少しでも利用しやすい環境に合い言葉に、メンテナンスにデータ量の増加に励んでおります。(祐)



### 文書館だより 第3号

平成四年(一九九二)三月三十日  
 編集兼発行 徳島県立文書館  
 徳島市八万町向寺山  
 文化の森総合公園内

印刷 徳島県教育印刷株式会社